

# 『ゾンビ学』付録

岡本健

## 資料のえじきーゾンビな文献収集

『ゾンビ学』本編では、ゾンビについて様々な角度から分析、考察を行った。研究を進めて行く上で欠かせないのが、第 1 章でも述べた先行研究や資料のリサーチである。ゾンビ学ではもちろん、どんなテーマで研究を始める時にも、この作業は必須だ。こうして先人たちの成果を把握することによって、自分はそこに何を付け加えることができるのか、自分独自の視点や考えは何なのか、と言ったことに気付くことができる。本稿では、ゾンビをテーマに研究を進める場合、資料をどのようにして探し出せばよいのか、実例を示しながら述べる。

### 1. ウェブ上のデータベースを使う

ゾンビの研究資料はどのように探し出せばよいだろうか。まずは手軽にネットで検索する方法を紹介したい。

資料を見つけ出す際に便利なサイトとして「CiNii Articles (サイニィ・アーティクルズ)」「CiNii Books (サイニィ・ブックス)」や「Google scholar (グーグル・スカラー)」「J-STAGE (ジェイ・ステージ)」「国立国会図書館サーチ」「カーリル」などを挙げることができる<sup>1</sup>。これらのデータベースサイトでキーワードを打ち込んで、関連研究を探していくのだ。

インターネットに接続できる環境にあれば、それほど手間がかからずに簡単に調べられるので比較的気軽な方法だ。「Google」や「Yahoo」といった検索サイトではだめなのかというと、そんなことはない。通常の検索サイトもどんどん使って調べると良い。ただ、こうした検索サイトの場合は、キーワードによっては出力結果が膨大になり、先行研究や研究資料として使える情報がなかなか見つからない場合もある。そうした時に、先ほど挙げたようなデータベースが役に立つ。

ひとまず、「Google scholar」のページにアクセスしてみよう<sup>2</sup>。画面は Google の基本画面と良く似ているが、検索窓の下に「巨人の肩の上に立つ」と書かれているのが目に入る。この言葉は 12 世紀のフランスの学者、シャルトルのベルナルドゥス (ベルナル) によるもので、現代の学問は多くの研究成果の蓄積の上に成り立っていることを意味している。

---

<sup>1</sup> それぞれのデータベースにはそれぞれの特徴がある。各サイトに説明があるので、利用する際にはそちらをよく確認してほしい。

<sup>2</sup> <http://scholar.google.co.jp/> (downloaded at 2014.11.07)

より遠くを見て何かを発見しようと思うのであれば、先人たちの研究成果が作り上げた巨人の肩の上に乗せてもらうことによって可能になる。「Google scholar」の窓に「zombie」や「ゾンビ」と打ち込んで検索してみよう。「zombie」と打ち込むと約 83,800 件がヒットし、「ゾンビ」と打ち込むと約 864 件がヒットする。ゾンビの巨人は意外に大きそうである。

次に、「CiNii(サイニー)」を使って、より詳しく文献の探し方について解説したい。「CiNii」とは、論文や図書・雑誌などの学術情報を検索できるデータベースで、国立情報学研究所 (NII: National Institute of Informatics) が運営している。このデータベースには「CiNii Articles」と「CiNii Books」がある。「CiNii Articles」の説明を見てみると「学協会刊行物・大学研究紀要・国立国会図書館の雑誌記事索引データベースなどの学術論文情報を検索できます」<sup>3</sup>とある。学会や協会の論文雑誌、大学が出している論文集である紀要といったものを検索できるわけだ。ためしに「CiNii Articles」で「ゾンビ」と打ち込んでみよう<sup>4</sup>。実に 232 件がヒットする。検索結果を見てみると、「すばるクリティーク 前衛のゾンビたち：地域アートの諸問題」(藤田 2014)「Interview 鶴田法男「Z：ゼット：果てなき希望」監督・脚本 原点回帰として挑んだゾンビ映画」(くれない 2014)といった雑誌記事や、「哲学的ゾンビ同士に、社会は存在するか？—N.ルーマンの社会システム論に於ける哲学的諸命題に関する一考察」(小林 2007)「ゾンビ・カテゴリー：ベック「個人化」論の射程」(ベック 2006)といった学術論文もある。筆者が以前に『コンテンツツーリズム論叢』という学術雑誌に書いた「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド：ゾンビの旅行コミュニケーション分析試論」(岡本 2012)も検索結果の中にある。

ところが、中には、「おや？」と首をかしげるものもヒットする。たとえば、次の論文だ。「大容量型高純度オゾンビーム発生装置」(森川ら 2000)である。ゾンビとは全く関係がなさそうであるが、「オゾンビーム」の中にゾンビが隠れている。「オ『ゾンビ』ーム」、この部分が検索キーワードと合致しているためにリストにあがってきているのだ。さらに難易度の高いものもある。「尿路結核に対するピルビン酸カルシウムイソニアゾン(ビボナイブレン)の治療効果」(高安 1959)である。尿路結石、ピルビン酸、カルシウム…。ゾンビと何の関係しているのだろうか。後半の物質名に着目していただきたい。「ピルビン酸カルシウムイソニア『ゾン(ビ)ボナイブレン』」。なるほど、ゾンビが隠れていた。このように、検索結果には自分が求めているものとは違った文献も引っかかって来るので注意が必要である。ただ、私の経験上、余計なものが引っかかるぐらいのところから始めるのがちょうど良いと思う。あまりに文献検索の範囲が狭いと、大切な先行研究を見逃してしまうかもしれないからだ。また、こうした自分が思ってもいなかった研究に触れ、学術の幅広さを知ることもしんじただけると幸いである。

次に、「CiNii Books」の説明を見てみると、「全国の大学図書館等が所蔵する本(図書・

---

<sup>3</sup> [http://support.nii.ac.jp/ja/cia/cinii\\_articles](http://support.nii.ac.jp/ja/cia/cinii_articles) (downloaded at 2014.11.07)

<sup>4</sup> 2014年11月7日に検索を実施

雑誌)の情報を検索できます」<sup>5</sup>とある。「CiNii Books」でも先ほどと同じように「ゾンビ」と打ち込んで見よう。こちらでも 158 件がヒットする。調べてみると意外とあるものだと驚く。具体的に見ていくと、『語れ!ゾンビ』(2013)『ゾンビ経済学』(クイギン 2012)『ゾンビ襲来』(ドレズナー2012)『ゾンビ日記』(押井 2012)などがヒットしている。『語れ!ゾンビ』はいわゆるムック本で、ゾンビカルチャーを紹介した雑誌だ。『ゾンビ経済学』『ゾンビ襲来』はいずれも海外の研究者の著作の翻訳である。『ゾンビ経済学』の方は経済思想を紹介するもので、『ゾンビ襲来』は国際政治理論を用いてゾンビハザードにどう対応できるのかを論じたものである。『ゾンビ日記』は『うる星やつら』『機動警察パトレイバー』『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』などで有名な押井守氏が著者の小説だ。ゾンビがあふれる世界で、スナイパーとして日々を過ごす主人公が描かれている。

一方で、こちらでも、「なぜ?」と思われるような文献が引っかかってくる。『ディアギレフのバレエ・リュス展: 舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち: 1909-1929』(セゾン美術館 1998)、『イサム・ノグチと北大路魯山人 = Isamu Noguchi · Rosanjin Kitaoji』(セゾン美術館 1996)などがそうだ。タイトルをどのようにくぎっても「ゾンビ」は入っていないさそうである。まさかとは思いますが、バレエにゾンビをモチーフにしたものがあるのか? 北大路魯山人とゾンビにどんな関係が…。妄想をかきたてられてワクワクしつつ、そんなはずもないように思う。種明かしをすると、実はタイトルや内容ではなく、「セゾン美術館」の中にゾンビが隠れているからなのだ。「セ『ゾン美』術館」というわけだ。「CiNii Books」で「ゾンビ」とキーワードを打ち込んだ際の検索結果の多くが、このセゾン美術館関連の文献である。雑誌にせよ書籍にせよ、検索した後にその内容をじっくり見て、どれが自分の研究に関連がある文献なのかを吟味する必要があることが分かる。

CiNii で検索した文献の中には、PDF でダウンロードすることが可能なものもある。そうした文献の検索結果には「CiNii PDF・オープンアクセス」や「機関リポジトリ」と書かれたアイコンがついている。例えば、「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド: ゾンビの旅行コミュニケーション分析試論」の場合は、「機関リポジトリ」と書かれている。「機関リポジトリ」とは、大学や研究所などの研究機関がその研究成果などを電子的な形態で収集、保存、公開するための電子アーカイブシステムのことだ。「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」のホームページにある「国内の機関リポジトリ一覧」を見ると、大学や研究所など 379 の機関がリポジトリを稼働させている<sup>6</sup>。「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド」はこの「機関リポジトリ」からダウンロードすることが可能なのである。早速クリックしていくと、「HUSCAP (ハスカップ)」というサイトに飛ぶ。「HUSCAP」は北海道大学学術成果コレクション (Hokkaido University collection of Scholarly and Academic Papers)

<sup>5</sup> [http://support.nii.ac.jp/ja/cib/cinii\\_books](http://support.nii.ac.jp/ja/cib/cinii_books) (downloaded at 2014.11.07)

<sup>6</sup> 「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」<http://www.nii.ac.jp/irp/list/> (downloaded at 2014.11.07)

という、北海道大学附属図書館が運営する機関リポジトリである<sup>7</sup>。ここからダウンロードして PDF 版のフルテキストを利用することができる<sup>8</sup>。

この時に注意しなければならないのは、その書誌情報だ。よく学生さんの中に、「この文献はどこに掲載されていたものですか」と聞くと、「ネットで検索したら出てきた論文です」と言って、引用表示をする際に URL しか載せていない場合がある。実は、これではまずい。ホームページやブログの場合は、そのタイトルと URL しか情報がないのはわかるが、元々雑誌や論文雑誌、書籍等に掲載されている記事であれば、掲載されていた文献の情報が無ければならない。「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド」の場合はどうか。CiNii の画面にそれらの情報は表示されるし、リポジトリの方にも書かれている。2012 年の論文であり、『コンテンツツーツリズム論叢』という雑誌の 1 巻、14 ページから 65 ページに掲載されていることが分かる。

ただし、CiNii の検索結果からは直接読むことができない文献も多い<sup>9</sup>。特に市販書籍や学術雑誌の場合は無料では読めないものがたくさんある。それではどうするか、あきらめる？ いやいや、何とかして読みたい。

## 2. 図書館や書店を活用する

CiNii では、ウェブ上では読むことができないものについても、それがどこの大学図書館に所蔵されているのかも教えてくれる。あるいは、『カーリル』というサイトを使えば、自分の目当ての書籍がどこの公共図書館や大学図書館にあるかがわかる。『カーリル』のページ下部「カーリルについて」「はじめての方へ」と書かれているので、こちらをしてみる。「カーリルは、全国の図書館の蔵書情報と貸し出し状況を簡単に検索できるサービスです。本を検索するとき地名を選択すると、その場所から近い図書館を自動的に選択して検索できるので、欲しい本が近くの図書館で貸し出し可能かすぐに分かります」とある<sup>10</sup>。貸し出し状況まで反映されているので便利だ。参考にして、図書館まで行ってみよう。

大学図書館は、大学によって異なるが、通常は一般利用者にも開放されている<sup>11</sup>。一般利

---

<sup>7</sup> リポジトリの名称は工夫が凝らされているものもあって面白い。たとえば、京都大学は KURENAI (Kyoto University Research Information Repository)、慶應義塾大学は KOARA (KeiO Associated Repository of Academic resources)、立命館大学は R-Cube (Ritsumeikan Research Repository) である。

<sup>8</sup> 岡本健 (2012) 「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド—ゾンビの旅行コミュニケーション分析試論」『コンテンツツーツリズム論叢』, 1, pp.14-65. 【ダウンロード URL】  
<http://hdl.handle.net/2115/51835>

<sup>9</sup> 学生諸君の中には、レポート提出締め切り間際になって資料が必要なことに気づき、「とりあえずネットからダウンロードできるものだけで済ませよう」と思う人もいるだろう。しかし、実は教員は参考文献リストを見れば、「ネットで集められるものだけで書いているな」と分かってしまうのだ。良い文献を探すためにも、時間的に余裕を持って調べ始めよう。自戒の念も込めて。

<sup>10</sup> 「カーリルとは？」 <https://calil.jp/doc/about.html>

<sup>11</sup> 一般利用の可否や条件などは事前にホームページで調べたり電話で問い合わせたりして

ユーザーに開放されているということは、当該図書館のある大学の学生ではなくても使うことができるということだ。多くの図書館では、貸し出しについては当該大学の関係者に限られているが、閲覧や複写は外部の利用者でも可能だ。自分が利用している図書館に求める本がないからといって、あきらめることはないのである。他大学の図書館や公共図書館<sup>12</sup>を積極的に利用して、文献資料を集めていこう<sup>13</sup>。都道府県や市町村の公共図書館は、規模の大小によっても異なるが、それぞれに特色のある資料を所蔵していることも多く、是非活用してみたい。

さらに、こうした各種図書館にいらっしゃる司書の方々は資料探しのエキスパートである。文献検索の方法や図書館の使い方など、遠慮なく質問して教えてもらおう。また、他の図書館から資料を取り寄せしてくれる場合もあるので、色々尋ねてみると良い<sup>14</sup>。さらに、専門図書館と呼ばれる分野に特化した図書館もある。様々な図書館に足を運んでみよう<sup>15</sup>。

さて、次の段階は、こうして集めた論文や書籍の最後につけられている「引用文献」「参考文献」欄を見してみる。先人たちがこれまでの研究をまとめてくれているのだ。そのリストから関連書籍や論文を見つけ出すことができる。その文献がどこにあるのか、『CiNii Books』や『国立国会図書館サーチ』に書名を入れて、そのありかを探していく。見つかった文献の参考文献を見ればさらに関連書籍が見つかり……、といった具合に芋づる式に関連文献を発見していけるのである。それらを収集し、読み込んでいくことで、対象に対する知識がどんどん身についていき、研究を進める上での基礎が出来上がっていく。たとえば、『ゾンビ学』の文末にある参考文献リストを見てほしい。そこには「ゾンビ」という語がタイトルに入っていない書籍や論文が多数挙がっている。その中には、この『ゾンビ学』という書籍を成立させるために無くてはならないものがいくつもある。

文献や資料探しはインターネットでとても便利になったことは間違いない。とはいえ、限界があるのも事実だ。それは、基本的には自分が思いついたキーワードによって検索す

---

から行くようにしよう。一般利用のための書類を準備していかなければならない場合や、学生の試験期間は図書館が混み合うため一般利用の制限を行っている図書館、そもそも一般利用者への開放を行っていない図書館もあるので注意が必要である。

<sup>12</sup> 『カーリル』の他に、公共図書館の在庫を検索できるサイトとしては『国立国会図書館サーチ』がある。

<sup>13</sup> 国立国会図書館（東京都）や国立国会図書館関西館（京都府）も、できれば一度は行ってみたい。

<sup>14</sup> たとえば、ブドゥーゾンビについての重要文献である『魔法の島 ハイチ』については、司書さんのおかげで現物を閲覧することができた。CiNii Books で本タイトルを見ると、全国でたった 4 館の大学附属図書館しか所蔵していなかった。私が所属する大学の図書館にはなかったが、奈良県立大学附属図書館の司書さんが他大学の付属図書館に依頼して、資料を取り寄せてくださった。

<sup>15</sup> 先行研究の調べ方の全体像は、佐藤（2015）で簡単にまとめられている。より詳細な調べ方が知りたい場合は、『図書館に訊け！』（井上 2004）『図書館のプロが教える〈調べるコツ〉』（浅野ら 2006）『図書館のプロが伝える調査のツボ』（高田 2009）『図書館で調べる』（高田 2011）などが参考になる。

る他にないからである。もちろん、Amazon のレコメンドシステムのように「オススメ」機能がついていたり、「連想検索システム」によって、人間が打ち込んだキーワードから連想されうるものまで含めて結果を返してくれたりするサイトもあるが、基本的には検索結果は、打ち込む人間の頭の中にある言葉の多寡に依存すると言えよう。打ち込むキーワードも「ゾンビ」だけではなく、「生ける屍」「リビングデッド」というような別の呼び名や、「吸血鬼」「キョンシー」といった似た存在を示す言葉が思いつけば検索の幅が広がる。ゾンビ映画が属するジャンルである「ホラー」「恐怖」や、ゾンビがよく見られる「コスプレ」「仮装」「テーマパーク」といったキーワードも良いかもしれない。ゾンビ学においても、「ゾンビ」だけをキーワードとして調べていたのではたどりつけない文献や資料がたくさんある。

こうした「限界」を超えるために、筆者は次のような方法を採用している。図書館や大型書店、古書店など、実際に書籍がたくさん並べられている場所に行くのだ。この場合、できるだけ多くの種類の本が置いてあるところが望ましい。大型書店の場合は、フロアがいくつもあるような店舗や、売り場面積が広い店舗がオススメだ。そこにいて、インターネットなどであらかじめ調べておいた書籍を探す。もちろんその書籍を購入したり、図書館の場合は借りたり、閲覧したりすることが主目的なのだが、その際、同時に周辺にある書籍も丁寧に見る。これが馬鹿にできない。図書館や大型書店では、利用者が希望の本を探しやすいよう、書籍はジャンルごとにまとめて置かれている。ということは、自分が対象としている書籍の周辺には、それに近い分野や内容の書籍がおかれていることになる。そのため、これまでの調べ方では出会うことができなかった書籍を発見できる場合がある。これは、図書館や書店などの特性である「一覧性」によるところが大きい。「一覧性」とは、目の前に並んでいて閲覧できる状態のことだ。

さらに、関係がなさそうな分野に、実は自分の研究に非常に重要な視点を持ち込んでくれる書籍や資料がある場合、それらを見出すにはどうすればよいだろう。「関係がなさそうだ」と思っている時点で、そうした分野のキーワードや書籍は眼中にないわけである。あるいは分野そのものを知らない場合もあるだろう。それでは探しようがないではないか。そんな時、筆者が使う手法は、「とにかく図書館や大型書店ですべての棚の間を歩き回ってみる」である。「そんな無駄な時間を過ごしたくない」そう思われるだろうか。実はこの時間は、その後の研究を進める上で、まったく無駄にならない時間である。それどころか、よりよい研究のために非常に有用な時間となる場合が多い。確かに、一つ一つじっくり見ていくと一日では回りきれないだろうし、さすがに疲れる。そこまでしなくても、棚にある書籍を横目に見ながらゆっくり回遊していただくだけでも新たな発見があるのだ。

一つ例を挙げると『ゾンビ学』の参考文献に挙げている『吸血鬼イメージの深層心理学』（井上 2013）という書籍は、非常勤講師先の大学で授業が終わった後に、大学生協の書籍部に立ち寄ってゆっくりと書棚を見て回った際に見つけた。購入してこれを読むと、さらに参考文献に取り上げられていた『吸血鬼伝承』（平賀 2000）が面白そうだったので、こ

ちらは Amazon で手に入れ、読んだ。いずれも『ゾンビ学』を執筆する際に大変参考になった。

こうした発見には、新たな関連文献が見つかる「発見」の場合もあるが、違った「発見」も含まれている。それは、自分が関心を持っていなかった分野の発見である。「こういうことを考えている分野があるのか」「こんな対象まで研究されているのか」といった発見だ。関心を持っていなかった分野にどのようなものがあるのか、を発見するわけだ。こうした知識を持っておくと、自分が関心のあるテーマを展開させていく際に、「あの時ちょっと見た分野と絡めると面白そうだな」とか「あの研究分野の考え方は自分の研究に応用可能だな」といったように、新たな発想の源泉になってくれる。この「偶然性」をどうやって引き出すかが重要なのだ。それゆえ、筆者は「とりあえず棚を見て回る」作戦を大切にしている。

この「一覧性」や「偶然性」は今のところ電子的な文献検索では十分に実現されていないように思う。実際に出向いて足で文献を探す方法も捨てたものではない。効率が悪いように感じる向きもあるだろうが、私の経験上は、逆に焦ってこうしたプロセスを飛ばしてしまった時のほうが、大切な文献の存在を無視してしまったり、凡庸な発想に落ち着いてしまったりすることが多いように思う。

### 3. 現場や人から資料を探そう

ここまで、ウェブ上のデータベースを活用する方法、図書館や書店を活用する方法について整理してきたが、「現場」で資料が見つかることも多い。

自分の研究テーマに関連する「人」に会う、「展覧会」に行ってみる、「博物館」に行ってみる、「イベント」に行ってみる、「映画館」に映画を観に行く、といったことである。こうした活動の中からも、先行研究や資料の情報が得られることがある。美術館や博物館の展示や図録を見ることで、自分の研究へのインスパイアを得ることは多々あるし、映画館に映画を観に行くと、館によっては関連書籍まで販売しているところがあったりして、思わぬ資料と出会えたりもする。

学生の場合は、同級生や先輩、後輩といった学生同士での情報交換はもちろん、大学教員をうまく使うことをおすすめする。大学の教員は、なかなか近寄りやすい場合もあると思うが、専門としている分野については非常に詳しいし、専門分野の話が嫌いだという人は珍しい（と思う）。自分が所属している大学の教員はもちろんだが、他大学の教員も人によっては対応してくれる。以下では、大学教員と研究の話をする際のコツを伝授したい。

まずは、既に1や2で紹介したような方法を使って、ある程度その分野について勉強してから連絡を取ることをおすすめする。ほとんど何も調べていないのに「〇〇に興味があります」とやってしまうと、逆にモチベーションを疑われてしまう。「本当に興味あるの？」と言われてしまうかもしれない。また、その際、連絡を取ろうとしている教員が書いている書籍や論文も読んでおくと良い。やはり、自分が書いたものを読んだ上で質問に来る人

と、そうでない人では、対応する側の気持ちが大きく違う。これらは、研究対象に対する熱意が感じられるかどうか、ということに直結するのだ。誰しもそうだと思うが、熱心な人にはもっと教えてあげたくなり、興味がなさそうな人に対してはそうではないだろう。少なくとも私は研究に対して一生懸命な人に対して時間を割きたいと思う。

自分の大学の教員であれば講義終了後に話しかけるとか、公開されているメールアドレスにメールしてアポを取るとか、オフィスアワー<sup>16</sup>に研究室を訪問するとか、いろいろな方法がある。他大学の教員の場合は、公開されているメールアドレスにメールをするのも良いが、学会や研究会、講演会、フォーラムやシンポジウムなどで直接会えることがあるので、そういう機会があれば、是非行ってみたい。最新の知見を聞くことができるし、その分野の研究者を知ることができる良い機会でもある。

以上、簡単ではあるが、先行研究や資料を得るための様々な方法をお知らせした。読者の皆さんが興味を持った研究対象を調べるのに、良い方法が見つければ幸いである。

#### 【引用・参考文献】

- 浅野高史・かながわレファレンス探検隊（2006）『図書館のプロが教える（調べるコツ）—誰でも使えるレファレンス・サービス事例集』柏書房
- くれい響（2014）「Interview 鶴田法男「Z：ゼット：果てなき希望」監督・脚本 原点帰帰として挑んだゾンビ映画」『キネマ旬報』（1667）、pp.71-73.
- 佐藤翔（2015）「先行研究の探し方」岡本健（編著）『コンテンツツーリズム研究』福村出版、pp.80-85
- 井上真琴（2004）『図書館に訊け！』筑摩書房
- 井上嘉孝（2013）『吸血鬼イメージの深層心理学—ひとつの夢の分析』創元社
- 岡本健（2012）「ツアー・オブ・ザ・リビングデッド：ゾンビの旅行コミュニケーション分析試論」『コンテンツツーリズム論叢』1、pp.14-65.
- 押井守（2012）『ゾンビ日記』角川春樹事務所
- 小林伸行（2007）「哲学的ゾンビ同士に、社会は存在するか？—N.ルーマンの社会システム論に於ける哲学的諸命題に関する一考察」『京都大学大学院教育学研究科紀要』（53）、pp.405-418.
- セゾン美術館（1998）『ディアギレフのバレエ・リュス展：舞台美術の革命とパリの前衛芸術家たち：1909-1929』展覧会カタログ
- セゾン美術館（1996）『イサム・ノグチと北大路魯山人 = Isamu Noguchi · Rosanjin Kitaoji』展覧会カタログ
- 高田高史（2009）『図書館のプロが伝える調査のツボ』柏書房
- 高田高史（2011）『図書館で調べる』筑摩書房

---

<sup>16</sup> 教員が必ず研究室にいる時間。この時間であれば、所属大学の学生は事前のアポなしに研究室を訪れても良いとされている場合が多い。多くの大学で設定されている。

- 高安久雄（1959）「尿路結核に対するピルビン酸カルシウムイソニアゾン（ビボナイプレ  
ン）の治療効果」『臨床皮膚泌尿器科』13（7）
- 平賀英一郎（2000）『吸血鬼伝承—「生ける死体」の民俗学』中央公論新社
- 藤田直哉（2014）「すばるクリティーク 前衛のゾンビたち：地域アートの諸問題」『すば  
る』36（10）、pp.240-253.
- 森川良樹・西口哲也・宮本正春・一村信吾・野中秀彦・川田正国・村上寛（2000）「大容  
量型高純度オゾンビーム発生装置」『真空』43（3）、p.427
- ベストムックシリーズ（2013）『語れ！ゾンビ』KK ベストセラーズ
- クイギン，ジョン（著）／山形浩生（訳）『ゾンビ経済学—死に損ないの5つの経済思想』  
筑摩書房
- シーブルック，ウィリアム（著）／林剛至（訳）『魔法の島—ハイチ』大陸書房
- ベック，ウルリッヒ（著）、吉田竜司・玉本拓郎（訳）（2006）「ゾンビ・カテゴリー：ベ  
ック「個人化」論の射程」『龍谷大学社会学部紀要』28、pp.49-62
- ドレズナー，ダニエル（著）／谷口功一・山田高敬（訳）（2012）『ゾンビ襲来—国際政  
治理論で、その日に備える』白水社

『ゾンビ学』2017年4月 人文書院発行